

アトランティスは 沈まなかった



絵夢ロイ

先生の声が教室に響いています。

「いいか、人類の歴史は古いが、はっきりとわかっているのは大体紀元前3000年くらいからなんだ。マンガにはアトランティス大陸とかムー大陸、レムリア大陸など幻の大陸の話があるだろ？でもそれはたんなる作り話と考えたほうがよさそうだ。」

そこでチャイムが鳴り授業が終わった。

学校からの帰り道、的場大地と高木美奈は並んで歩いていた。クラブ活動で帰りが遅くなり、大きな満月が昇っていた。二人とも東京郊外の小学校6年生である。

「うわー、きれいなお月様。」

「高木さんは月にウサギがいるっていうお話、信じる？」

「やだー、的場君たら。月には空気が無いのよ。そんなものいるわけないじゃない。」

「うわー。高木さんて夢がないなあ。僕だってそのくらいは知っているよ。ホラあの月を見てごらん。明るいとこりと暗いところが見えるでしょ？その模様がウサギに見えるんだよ。でもどうに見ればウサギに見えるのかなあ。」

的場君は額に浮かぶ汗をぬぐった。高木さんとのやり取りでかいた冷や汗だけでなく、日が落ちたというのに気温は一向に下がらず暑いのである。地球は増え続ける二酸化炭素により温室効果は悪化していた。

二人の家への分かれ道となり、二人はさよならを言って分かれた。

高くそびえ、街を一望できる城の塔に、その一団は集っていた。皆あごひげを長くたらし、黄金ともプラチナとも解らないような、光のように輝くマントを羽織っていた。これらの人々はいかにも高貴な身分と解るのであるが、顔の表情は誰も疲労で満ち、時々ため息のみが聞こえていた。長老であるバジルが言った。

「あー、我々もとうとうここにいる100名だけになってしまった。思い返すに、今から6000年前は、主ポセイドン様のもと、我々の種族は、この地アトランティスで、人間より神と崇められ、栄華を極めたものだ。それなのに今は、見てみる。何処へ行っても人間ばかり繁栄しているではないか。ここアトランティスも同じだ。」

城の石窓から遠く水平線を見ながら、過去を思い出してしゃべる長老の言葉に、となりに座っていた、ジーニが答えた。

「バジル殿、そうお悔やみばかり申すな。たしかに各地に散っていた我々一族は、皆人間と同化し、自分たちは神の種族であるという遺伝子情報すら忘れてしまっている。最後に残った我々が頑張らなければ、我々神の本家であるゼウス様に申し訳が立たないではないか。」

バジルは、ああ、というように頷き、改めて集った皆の顔を見て言った。

「すまない。歳を取るとつい愚痴が多くなってな。今日集っていただいたのは、実は緊急事態の報告が天文班よりあったからなのだ。わしは概要を聞いて、事の重大さに驚いているところじゃ。まず天文班より詳細を説明し、そのあと皆の意見を聞きたい。」

そういわれて立ち上がったのが、天体観測を専門にやっているジルコであった。

「では報告する。ことが重大ゆえ、各自、動揺せずに聞いていただきたい。」

そう言うとジルコはそこに集った皆々を見回し、更に言葉を続けた。

「最近、銀河からの隕石群が小惑星帯に突入し、小惑星の一つが太陽の公転軌道を外れてしまった。その小惑星の軌道を計算すると、今から半年後に地球に衝突する。」

集ったメンバーの顔に緊張が走った。誰もが次に聞きたいことは同じであった。皆の目がジルコの口元に集中している。ジルコが口を開いた。

「それで、小惑星が地球に衝突した場合のことであるが、、、、。」

一旦、ジルコは口を結んだ。そしてゆっくりはっきりとした声で言った。

「小惑星は、ここアトランティスに衝突する。」

しばらくシーンとした状態が続いた。そして誰かが言った。

「衝突するとアトランティスはどうなるのだ？」

それには長老のバジルが答えた。

「小惑星は、普通の隕石とは違う。ずっと大きい。大きな質量をもっているのじゃ。超高速の運動エネルギーが、衝突により一瞬にして開放されると、そのエネルギーは途方もない熱エネルギーとなり、アトランティスを蒸発させる。」

皆からは本当に衝突するのか、といった質問が繰り返し出された。しかし、ジルコが見せるデータは、誰の目にも衝突は間違いのないことを教えていた。

先ほど長老にお悔やみばかり申すなと言ったジーニさえも、表情に絶望感がはっきりと現れ、誰もがあきらめに近い様子を示していた。どこかで、こんなささやきが洩れた。

「あー。これで我々神もおしまいなのか。」

「なら、その前にどこかへ逃げ出せばよいではないか。」

「そうだ、こんなアトランティスなんか捨てて逃げればいいのか。」

お城の塔の中は、ガヤガヤと騒然としてきた。その時である。長老のバジルが皆を制するように言った。

「諸君、落ち着きたまえ。」

長老の言葉に、皆は長老の方を向き直った。皆が自分を注目していることがわかるとバジルは言った。

「わしも、最初天文班からこの話を聞いたとき、信じがたかった。しかしデータを見て信じざるを得なくなった時、ならばこの地を捨てて避難すれば良いのではないかと考えた。しかし、問題はそれだけではないのだ。ジルコ、あの話をしてくれ。」

長老に促されて、天文班のジルコは言った。

「実はもう一つの問題とは、スペクトル分析によると、軌道を外した小惑星の成分は、ウランなど重い金属を大量に含んでいるということです。小惑星は火星と木星の間にあった惑星がこなごなになってきたと考えられていますが、元の惑星の中心核部分の、重い元素から構成されていた部分が、今度の小惑星なのです。」

「で、問題とは何なのだ？」

待ちきれずに誰かが質問した。

「はい。惑星の衝突によって大量の放射能がばらまかれるということです。即ち、われわれがアトランティスを捨てて逃げたとしても、その放射能からは逃げられないということなのです。」

「うーん。」

といううめき声があちこちから聞こえてきた。皆額から流れてくる冷や汗をぬぐっていた。絶望。そして新たなる絶望。しばらく静まり返っていたが、誰かが叫んだ。

「何とかならないのか？ 助かる道はないのか？」

その言葉を、長老のバジルは待っていた。バジルは皆が苦悩する姿を眺め回し、そしておもむろに口を開き力強く言った。

「諸君！　そこでだ。」

長老からの思わぬ力強い言葉に、皆長老を注目した。バジルはライオンの毛皮の袋に収められた、黒炭のような感じで固い物質で作られている小箱を取り出し、そこから一枚の不思議な紙のような物を取り出し、それを皆の前に広げた。

「よいか、これはかつてのこの領主、ポセイドン様より代々受け継がれておったものじゃ。アトランティス滅亡の危機の時は、これが役立つだろうとの言い伝えである。」

皆首を出して、それを眺めた。

そこには大きな丸と小さな丸が書かれている。大きな丸にはその一角を線で囲み、そこから小さな丸の一点へと結ぶ矢印のようなものが書かれているのである。その他記号らしい模様が沢山描かれている。

「何だ、これは？」

「??」

あーだ、こうだと、がやがやとなったが、長老のバジルは言った。

「今から一週間後、もう一度集ってくれたまえ。それまでに、科学班でこの謎を解いておいてほしい。」

そう言って、バジルはそれを科学班のピートに手渡した。

「それから、治安を維持するため、くれぐれもこのことは領内の人間には知られることのない

ように。」

そう、バジルは言い、今日のところは閉会とした。

苦悩の1週間

皆が去ったあと、バジルは塔の石窓から、眼下に見えるアトランティスの街並みを眺めてみた。今バジルがいる塔の両脇には、ポセイドン神殿とポセイドンの妻クレイトー神殿がそびえていた。神殿にはオルハリコンが張られまばゆく輝いていた。その神殿のまわりには、堅固な城壁が築かれ、人間界と遮断していた。許されたごくわずかの人間しか、その内側には入れなかった。城壁の内側の神殿はポセイドンの子孫である神々の住居であった。城壁の外側には幾重にも円状の堀がつくられ、それらは通常は水路として使われていた。周りには多くの商店や工場が並び人間の住居もそのあたりに密集していた。目を海に向ければ大型の船が貿易のため港を出ていくのが見えた。アトランティスは強力な軍隊を持っていて、あちこちで軍隊が訓練している様子が見えた。

それを見ながらバジルは思った。

「あー。ポセイドン様が国をお創りになって以来6000年。こんなに繁栄するようになった。しかし、何という不遇。これがあと半年で滅びてしまうことになるろうとは。」

たまには領内の様子でも直接見てみよう、バジルは城壁の外へ出た。神殿と違い、城壁の外は、人間の暮す世界である。すぐに衛兵が出てきて、あっという間に警護の兵隊が100人の大行列になってしまった。本当は一人で歩いてみたかったのだが、人間の前では神としての威厳も示さねばならず、窮屈な気持ちであったが、我慢して大行列とともに歩いた。砂ほこりに混じった人間臭さが街には漂っていた。何処へ行っても、人間は忙しく働き、街には活気がみなぎっていた。自分たち神は、人間をここまで伸ばしてきたんだという、ある意味の満足感が得られた。ふと、人間が飲んでいるぶどう酒とはどのようなものだろうと興味が湧き、人間の市場で売られていたぶどう酒を警備の兵隊に買わせた。神がぶどう酒を買うということで、市場は大騒ぎになった。城内にもどり、バジルはそのワインを飲んでみた。程よい苦味とすっぱさが口に広がった。その時バジルは、あー、人間は神に近づいているのだと思った。だがそれは人間が贅沢をしているとか、けしからんという気持ちではなく、今度の危機から彼らも救えるのだろうか、そればかりが頭の中をよぎった。

バジルよりポセイドンの秘密の図面を預かった科学班のピートは、すぐに部下とともに図面の解読に入った。彼らは神殿の図書館に寝泊りして、ポセイドンがこの地を創った頃の資料をかき集め、膨大な資料を参考に、図面の謎の解明を解き進めた。

多くの神々にとって、気の遠くなるような1週間が経過した。このまま助かる道がなければどうしようと、眠れない日々が続いた。しかし、さすがに神であり、おろかにも、もう先はないのだからと悲観して、今のうちに楽しめることは何でもやっつけてしまおうと、羽目を外すものはいなかった。

城の塔にまた、神々が集合した。例の光り輝くマントを皆羽織っている。長老のバジルは会議のはじまりを宣言した。

「諸君。先週の重大議題に対して、これより、今後どうしたらよいのか、これより検討に入る。結論の如何によって、取り乱したりすることのないように。我々にはこのアトランティスを最後まで率いていく責任があるのだから。」

そう言って全員を見回すと、皆、わかっているというふうに頷いている。それを見たバジルは言った。

「では、科学班。報告したまえ。」

科学班のピートが皆の中央に進み出た。連日の徹夜で目は充血し、食べ物も十分に取らなかったのではおはこけていたが、その目は爛々と輝いていた。

「諸君、今日ここに、我々神一族の存亡の可否のみならず、このアトランティスに住む人間をも含め、アトランティスの救済について希望が出てきたことを報告する。ただしその実現のためには、各セクションが一つになり作業を進めることが必要である。」

そう言うと、ピートはコップ一杯の水を一気に飲み干し、話の核心に入った。ポセイドンより預かりし図面を広げた。

「まず言おう。この図面である。この図面に描かれた大きな丸。これは地球である。そしてこの小さな丸。これは月である。この大きな丸の中で矢印の起点として囲んである部分、これはここアトランティスである。そしてこの矢印の行き先は、月の中央部の一点を示している。即ち、この図面の意味することは、アトランティスそのものを月へ移転させるということである。」

集った皆々はシーンとしていた。誰もまだその意味がよく解からないのである。長老のバジルが聞いた。

「ピート君、アトランティスを月へ移転させるということは、どういうことかね？星間船でも作って、皆それに乗って移り住むということかね？」

ピートはそうではないと首を横に振り、もう少し詳しい話を始めた。

「これは皆さんきっと驚かれると思うのですが、このアトランティスを、地面ごと切り離して、月へ移動させてしまおうということなのです。」

さすがにそれを聞いた皆々は、まさか、信じられない、夢物語だ、と騒々しくなった。当然そうなることを予想していたピートは更に説明を続けた。

アトランティスの過去

ピートの説明をまとめると次のようなこととなる。

ポセイドンの図面に描かれた大きな丸に地図を当てはめると、矢印の元となっている線で囲まれた地域は、今のアトランティスの場所と一致している。図面の小さな丸、即ち月に描かれた矢印の先であるが、実はここにはポセイドンやゼウスなど神々の生誕の秘密が隠されているという。神々の祖先は、ある日突然地球に生まれ出でたものではないと。その起源は更にはるか太古にさかのぼる。今の宇宙ができたのは約146億年前であると考えられている。この宇宙が誕生した時に、実は幾つものベビー宇宙が誕生していたのだ。それら宇宙の誕生の時、宇宙の成分のちょっとした違いによって、われわれアトランティスが存在する宇宙のように、穏やかに成長する宇宙もあれば、中にはあっという間に成長して、すぐに縮んで消滅してしまうかわいそうな宇宙もあった。

実はそのベビー宇宙の一つにわれわれ神の祖先は誕生したのだ。その宇宙は寿命が短かった。逆に宇宙の寿命が短い分、その中での時間の経過速度は、我々の宇宙と比べると何倍も早く、我々の祖先はあっという間に、信じられないほど科学技術を進化させたのであった。ある時、自分たちの宇宙が消滅に向かっていくことを知り、巨大な移転計画が実行されたのである。我々がアトランティスを地面ごと移そうとしていることに比べたら、想像し得ないほど、巨大な計画であったのだ。彼らは巨大な宇宙船を創り、民族及び動物全てを乗せ、故郷を立ったのだ。彼らの目指したのは、宇宙を連絡しているワームホールを通り抜け、親宇宙への移転であったのだ。彼らには目的の親宇宙が住むのに適した環境かどうかはわからなかった。しかし留まれば死しか待っていないため新天地を求め、思い切ってそのワームホールに宇宙船を進めたのだ。そして、厳しい宇宙航海でたどり着いたのが、我々のいる宇宙である。幸いなことに、この宇宙は穏やかに膨張する宇宙であった。

無事に親宇宙に出ることができたが、小さなワームホールを通過するため巨大なエネルギーを注入しながら進んだので、宇宙船の推進装置は大きな損傷をおってしまい、彼らはこの宇宙を漂流することになってしまったのである。ワープができなく補助動力だけで航海を続け、気が遠くなるほど年月を費やし、ようやく居住が可能な星を見つけたのだ。彼らはその星の衛星軌道に宇宙船を乗せて、その星に移住を行った。その星が地球であり、乗ってきた宇宙船が月である。

誰もが地球の緑に魅了され、無人のコントロール装置のみを月に残して全員地球に移り住んだのだ。それが6000年前であり、地球の人間にとって我々は神として迎えられたのだ。ゼウスもポセイドンも国づくりに励み、国は大きく素晴らしくなった。しかし人間との交配が進み、寿命も極端に短くなり、世代交代の間に過去の歴史はほとんど忘れ去られてしまったのだ。

城の塔に集った皆々は黙ってその話を聞いていた。自分たち祖先の偉大な叙事詩を聞かされて、中には涙を浮かべている者もいた。皆偉大な祖先の末裔であることを確認しあっていた。長老のバジルもしみじみとしながら言った。

「わしも寝物語に、わしらは遠くの宇宙からやってきたと聞かされたことはあった。しかし、それはただの子守唄としか思っていなかった。よくそこまで調べ上げてくれた。」

科学班のピートは長老に向かって一礼して話を続けた。

「長老。実はポセイドンの地図ですが、秘密はこの地図が収められていたこの黒い小箱にあったのです。我々も神殿の図書館で過去の資料をいろいろ検討しましたが、地図に書かれた丸の意味はわかったのですが、そこから先へ行くことができませんでした。あきらめかけていた時、偶然にも神殿の図書館のあちこちに小さな四角い穴が空いているのを発見しました。見た感じちょうどこの箱が入りそうな大きさです。たまたまそばの穴にこの箱を収めてみました。するとどうでしょう。箱がしゃべり出すではないですか。違う穴に入れると違う話をするのです。その中に、先ほど私が申し上げたことがあったのです。」

それを聞くと、騒々しくなり、誰かが言った。

「なら、これからどうすれば良いのか、それもあったのかね？」

ピートは皆を見回し、はいとうなずき、計画を示した。

「アトランティスで作っている金属にオルハリコンがある。あれはこの国で採れる鉱物を精錬する時、担当の神官が秘密の薬を添加することになっている。これは、過去からの儀式にのっとり行われているものである。実はその添加する物質に秘密が隠されているのです。その物質は、我々の祖先がかつて栄えた故郷で製造していた、モノポールと呼ばれる単磁極子なのです。SとNの二つの磁極をもつ磁石と違い、片方の磁極しか持っていません。ポセイドンの時代、地球へ大体の資機材を移送し終わった時、一つ困ったことが起こりました。それは、神の中に宇宙にはもっと良い星があるはずだと唱えるグループが出てきたことです。ポセイドンらは結束を固める事が重要と考え、地球に降り立った移住用宇宙船は2度と月へは戻れぬよう破壊しました。それでも万が一の時のため月へ戻る準備を残していたのです。モノポールを混ぜたオルハリコンを神殿や城壁に埋め込んでいき、必要であれば、その特性を利用して、月に残した巨大な電磁気装置を稼動し、磁力で月までアトランティスを移動させようと考えたのです。

これからのことは我々科学班の計算によります。

小惑星の衝突まであと半年。アトランティスに埋め込んだオルハリコンはまだまだ足りません。大急ぎでオルハリコンを増産し、国のいたるところにオルハリコンを埋め込まねばなりません。そして、小惑星の衝突の直前に、国中の火山を爆発させ、地表をマグマに乗せて地殻から切り離します。月の電磁気装置を稼動させ、オルハリコンとは極性が逆の巨大磁極を月に作り、それで一挙に月に吸引してもらいます。」

こうして半年の間、作業が急ピッチで進められた。オルハリコンを増設し密度高くアトランティスの各所に埋め込んだ。月との通信は、例の黒い箱にヒントが隠されていた。神殿の中に遠隔コントロールが隠されており、きちんとそれが動くように整備した。それから移住を希望する人間も連れて行こうということになり、家を密閉構造に改築し、真空中でも空気に困らないように準備した。火山が一度に噴火するように、各火山の地下深遠部にマグマ制御装置も仕掛けられた。食料や水を大量に蓄えた。

これら作業の目的は人間には知らされなかった。いよいよ1月前に、天文班にて再度小惑星の軌道計算を行い、衝突が何時何分何秒まで確定したとき、この詳細を人々に告げた。船でよその国へ逃げても惑星の衝突で発生する多量の毒からは逃れることができないから、皆で月へ行こうと。

結果として多くの人間は、これはただの冗談だと思った。一部の人間は海へ出てしまえば安全だと考えて船に乗った。

衝突の1週間前である。目の良い者には、夜空の、今までなかったところに暗い明かりがぼつんと見えるようになってきた。小惑星の衝突が本当であることを、皆が理解し、港に残っていた船は、逃げ出す人間で満杯となった。この噂を聞き、直前まで船を回し、高額で避難させてやろうとするものも現れ、相当数の人間はアトランティスを去った。

神殿ではもはや人間の動きを止めることはできなかった。

3日前になると、誰の目にもはっきり近づいてくる小惑星を見ることができた。重力バランスが変化しているせいか、突風が吹くようになり海も荒れてきた。2日前は最後の船が港を出た。残った人間は約1000人ほどであった。その夜、ピューピューと大風が吹く中、アトランティスの神殿に人間も立ち入ることを許され、そこで祈りが行われ、月に着くまでは空気がなくなるから、絶対に外に出ないように注意が行われた。

さて、小惑星衝突の当日である。人間はひっそりと家に閉じこもった。神はそれぞれ担当部署に張り付き、装置の点検を行っていた。城の塔には天文班が待機し、月の磁力装置のスイッチを入れるタイミングを見計らっていた。火の玉が接近してくるのが見て取れ、誰もが喉をカラカラにしその瞬間を待った。天文班は衝突のちょうど1時間前に火山の噴火スイッチを押した。

ゴロゴロゴロという地鳴りがアトランティスを響き渡った。その直後である。ドーンという大音響とともに国中の火山が爆発を開始した。それと同時に地震が発生し、アトランティス全体が大きく揺れ、アトランティスは地殻から切り離されてマグマの上を漂っている状態となった。火山からあふれた溶岩はアトランティスの中心部にも流れ寄せ、まるで地獄の中にいるようだった。硫黄の鼻をつく匂いの中、空を見上げれば、真っ赤な火の玉がすぐそこまで迫っている。皆は手を固く握り締め、呪文のようなものを唱えていた。月の磁力装置はエネルギーを瞬時に放出し最大限の効果を発揮するよう、そのスイッチは押される時を待っていた。小惑星との万有引力も計算にいれ、もうこれ以上は待てないギリギリの時、そのスイッチは入れられた。

月に突然現れた磁極からの磁場は地球へ作用した。既に真っ赤な溶岩の上を浮いているだけのアトランティスは、音もせずフワッと宙に舞い、月の磁極めがけて加速しながら地球を離れていった。

その直後である。目がつぶれるほどの閃光が走った。小惑星はさっきまでアトランティスがあった場所に衝突して、瞬間に熱となったエネルギーは、波状に熱波となりアトランティスの周辺の国まで押し寄せ、それらの国土を廃墟とした。遠く海上に浮かび、物見をしていた船は一瞬に

して蒸発した。

神殿の中では、月の磁力装置の電流の向きを変え、オルハリコンと同じ極性になるように制御し、今度は反発する力を利用し、スピードをコントロールした。月と激突することなく無事に、軟着陸に成功した。その数、神100人、人間1000人であった。

彼らがたどり着いた場所は、ポセイドンの地図に示された矢印の終点であった。そこは現代の地球からは見えない裏側の場所であり、そこには月、即ち大昔に使われた宇宙船への入り口があった。

装置の多くは壊れていて動かなかったが、彼らが何とか生活していけるだけの機能は十分にあった。

そして気の遠くなる時間が流れた。

20世紀宇宙開発競争時代

第2次世界大戦が終わり、世界はアメリカとソ連の冷戦の時代へ入った。核弾頭の保有数が競われ、世界が何回も滅亡できるだけの核爆弾が製造された。競争したのは宇宙開発分野においても同様であった。まず1957年にソ連が始めて無人のスプートニク衛星を打上げた。アメリカもすぐに追いついたが、次は有人宇宙船の打上が競われ、ソ連が1961年にガガーリン少佐を乗せた衛星を打上げた。次に両国の競争は、地球の衛星である月の攻略へと移って行った。

その当時も誰しも素朴な疑問があり、それは、いつも表しか見えない月の裏側はどうなっているのだろうか、ということであった。

1959年に打ち上げられたソ連のルナ3号が、始めて月の裏側の写真を送ってきた。その写真により、月の表には海と呼ばれる黒っぽく見える部分が多くあるが、裏側には海がほとんどなく、全体が白っぽく見えるということであった。

その後1969年にアメリカのアポロ11号が始めて月面に着陸し、その後のアポロ計画で月の表側の「月の石」がたくさん地球へ持ち帰られ、多くの研究がなされた。その後1994年にアメリカから打ち上げられたクレメンタインの調査では月の裏側のオリエンタル盆地の地殻の厚さは、月の平均の地殻の厚み68 Kmに対してわずか4 Kmしかないことがわかってきた。また1998年に打ち上げられたルナ・プロスペクター探査機によると、磁場が無いはずの月に、局所的に強い磁場を持つ場所があることがわかってきた。

カーン、カーンと鐘の音が響いている。居住区のあるところから白い衣装に実を包んだ、一団が礼拝施設へと足を運んでいった。科学庁のネイル長官もその列に入っていた。

礼拝施設は、ほぼ満席となりしばらくは、隣同士でヒソヒソと普段のおしゃべりが続いた。やがて、礼拝施設の奥手にある祈祷演壇に、輝くマントを羽織った長老のリンデが席に着いた。それを見るとヒソヒソ話はサーと終わり、静寂が礼拝施設を包んだ。リンデの祈りの言葉が響いた。

「我らの偉大なる創設の輩よ、今、我々がここにあることは、かの地球でアトランティスと小惑星との衝突という、未曾有の危機を乗り越えた、すべてあなた方の英知と、勇気によるものであり、更にさかのぼること、ポセイドンの残した血に受け継がれる我ら一族の遺伝子に記述されている神秘によるものである。さあ、皆で思い出そう、我々がこの地に来た時のことを。これを語り継ごう、我らの子供たちに幾末も。」

祈りの言葉は更に続いていた。かつてアトランティスの救済を指導した長老のバジルや、アトランティスの月への移転というとてつもない計画を立案した科学班のピートラに対し祈りをささげているのである。

あの時から、既に12000年以上時間が経過した。バジルやピートラは大昔に他界し、今ここにいるのは彼らの子孫である。あの時、アトランティスから月へやってきた神100人と人間1000人は次第に混血が進み、今は全員が神でも人間でもない、月の住人になっていた。人の数はコントロールされて、今も約1000人である。

12000年前、アトランティスから月へ来た当時、その遙かな昔に、ベビー宇宙から親宇宙へ移住する宇宙船であった月は、操縦するための機能の多くが壊れていた。またアトランティスから移住した科学班のピートラにしても、その太古の昔にこの月を建造した高度の科学技術は持ち合わせていなかった。特にこの巨大な宇宙船でワープを行ったりするために必要な莫大なエネルギーを製造する装置については、その原理もわからなかったのである。

彼らはまず居住区の整備を行い、何とか全員が住めるようにした。次に、月宇宙船の調査が行われた。幸いに、食料や水、酸素を作る装置は無事に残っていた。試行錯誤の結果それら装置を動かすことができるようになり、月での生活が確保された。

12000年前、アトランティスが埋め込まれたオルハリコンとの磁場の反作用で軟着陸した場所は月のオリエンタル盆地の中心であった。そこは地殻が4kmと薄く、宇宙船への入り口が設けられている場所であった。オリエンタル盆地には、アトランティスの城の塔や神殿がそびえる景観となった。その当時、月の自転速度と地球を回る公転速度が一致してなく、月は表と裏を繰り返して見せていたため、地球からは月のアトランティスの神殿が見えたことであろう。

月での生活が安定したあと、月では地球の人間との関係をどのように将来に渡って維持するのがよいのか協議をした。お互いに干渉し合うことはやめるべきとの意見が大多数であった。地球上から月のアトランティスの神殿が見えてしまうのは、地球人に月の侵略という動機付けをしてしまうのではないかとの意見も出た。そこで、やがては地球との潮汐力で、月はある方向のみを地球に向けて、見かけ上は止まることが解っていたが、オリエンタル盆地が常に地球から見えない裏側となるように、コントロールして止めた。それが今から約10000年前のことである。それ以後は月の自転速度と地球を回る公転速度が地球の自転速度と同期をとり続け、地球からは常に月の表側しか見えなくなった。

重大な問題

礼拝が終わりネイルは科学庁に登庁した。本日も重要な会議が控えていた。

1世紀ほど前の重要問題とは、地球から電波が届くようになったことであった。電波を使った通信というのは、ここ月ではかなり古い方法となっていたのだが、たまには用いられていた。地球から電波が届くということは、彼らは月からの電波を受信できることを意味していた。それ以来、月では電波は使用しないことになった。月の科学庁では地球からの電波を常に受信し、解読が行われている。勿論テレビも受信でき、地球上のことは手にとるようにわかっている。

半世紀ほど前の重要問題とは、地球から打ち上げられた月の探査機が飛んでくるようになったことであった。アポロにしても無人の探査機にしても、月の周回軌道を飛ぶため、月の裏側が丸見えになってしまうのである。オリエンタル盆地に残っているアトランティス遺跡はクレーターの形状をした巨大なドームに収納した。そうすることにより、探査機の写真からは逃れることができた。オリエンタル盆地そのものが直径300Kmもあるので、全く目立つことはなかった。

そして、今日の重要問題である。これは極めて深刻な問題であった。20世紀後半から、地球上では工業が大いに発展した。工業の多くはエネルギーを石油に求めた。また、どの国も自動車社会となり、個人レベルでも大量のガソリンが消費され続けた。始めのうちは広大な海が二酸化炭素を吸収してくれていたが、それも飽和状態に近づいた。その結果、地球の大気中二酸化炭素濃度は上昇し、太陽より降り注ぐ熱は、大気の中に蓄積され続けた。

その結果、地球の持つ総エネルギー量が、急激に増加し始めたのだった。これは月のシステムにかなりの影響を与えた。常に月の表を地球に向けるため、地球と月とのエネルギーバランスが釣り合うように自転速度を制御して来たのだが、地球のエネルギーが急に大きくなってしまい、このままでは制御が間に合わず、地球から見て月が回転する状態、即ち、月の裏側を地球に向けることになってしまうのだ。

科学が急速に進んだ地球人は、月の裏側を見れば、どんなに巧みに隠しても、そこにアトランティスの遺跡があることを発見してしまうだろう。更に月に住人がいることを発見するだろう。

アポロが示すように地球人は月に来ることもできるし、彼らが核ミサイルを何万発と保有していることもわかっている。地球人はどのように反応するのであろうか。万万が一、武力行使という局面になれば、月の科学は核を遥かに越える破壊力を生み出すことは可能であったが、数の少ない月の住人にとって、争いは避けねばならないことであった。

ずっと月の秘密を守ってきたアトランティスの末裔にとって、これはきわめてややこしい緊張を引き起こす問題であることは容易に理解できた。月の秘密が地球に暴露されることはなんとしても避けなければならない重大な問題であった。

地球が21世紀に入り、ますます温度の上昇が続いた。地球では環境問題が騒がれ、二酸化炭素の排出量に対して国際的な規制を行おうと、各国が調整に入った。しかし実のある効果は得られなかった。

太古の宇宙船、月に居住する住人の人口は約1000人。重要なことは全員参加の会議で決められた。議長は長老のリンデである。

最悪の事態を避けるため、地球の指導者と話し合うべきであるとの意見が出た。いや、そんなことをして、我々の存在を自ら暴露するようなことは、止めるべきであるとの意見も出た。その時、科学庁長官のネイルによって、直面している危機について詳しく説明がなされた。その

当時、即ち21世紀の始めの段階において、地球とのエネルギーバランスを均衡させるため、月の重心をずらして対応していたのだが、月の構造上、これ以上重心をずらすことが限界を超えてしまうのだ。また対応は、地球の温度を下げるしかないという解決策も示したのであった。

なら、地球と交渉するといって、何を交渉するのかという問題となった。議長のリンデは、月の秘密を地球に暴露することは最後まで避けたいという基本方針を示し、そのためには、解決策である地球の温度を下げるため、二酸化炭素の地球大気中濃度の低減に、月が協力することを申し入れたいと述べた。当然これは一般の地球人には解らないよう最高の機密の中で行われるべきであるとし、交渉する相手は、月に衛星を送り込んできた、アメリカ大統領及びロシア大統領の二人だけとすることを提案した。

月の全員会議で、この提案は可決した。過去12000年もの間、地球から隔離を行ってきたアトランティスが、相手が地球人の二人とはいえ、自分たちの存在を明らかとするという意味で、今までのアトランティスの方針が大きく転換される日が来たのだった。さっそく、ミッションの代表が選ばれた。それには科学庁長官のネイルが適任であった。

月には、かつて18000年も前に、ゼウスやポセイドンが地球上に降り立った連絡船と同型の物が残されていた。すぐれた科学で作られている宇宙船は、今でも動いた。

さっそく地球とのコンタクトが始められ、極秘でアメリカ大統領及びロシア大統領へメッセージを届けた。それはアメリカおよびロシアはそれぞれ極秘の任務に当たる部隊を組織し、大西洋上の指定する座標の海域で月からの使者と二人の大統領が同時に会見を行うというものであった。はたしてこんな突拍子もないメッセージを、地球の大国であるアメリカやロシアの大統領が信じるのであろうか？

ネイルはあることを行った。それは月面に残されていたアメリカが打ち上げたアポロの着陸船と、旧ソ連が打ち上げたルナの残骸から、それぞれ国名を刻んである部品を拾いだし、モノポールを加えて作ったオルハリコンの箱にそれら証拠となる品を入れ、月面より磁極を操作することにより、それぞれホワイトハウス及びクレムリンに届けたのであった。

さて、いよいよ、約束の日である。ネイルは連絡船のクルーとともに月を飛び立った。クルーの中には、大統領たちは現れないのではないかと心配する者もいた。ネイルは彼らが現れることを確信していた。ネイルの宇宙船は磁力線を吸収する物質が塗布してあり、レーダーに察知されることはなかった。目的の海域上空に宇宙船を待たせ、自らはモノポールを編みこんだスーツで身をまとい、宇宙船からの磁力線に誘導制御されて、目的の海域までゆっくり空中を降下していった。眼下に約束の海域がひろがると、ネイルは自分の体が騒ぐのがわかった。ポセイドンの血が騒いでいるのだ。今彼が降りていこうとしているのは、12000年前までアトランティスがあった、あの場所なのだ。

とうとう帰ってきた、という懐かしさがネイルの全身にあふれた。小惑星が衝突する危機を果敢にも乗り越えたあの当時のことが、走馬灯のように脳の中を駆け巡った。

ふとネイルは我に返った。思わず苦笑をした。12000年前のことなんて解るわけないのに、夢でも見たのだろうと思った。眼下には青い海が広がっているだけで、何も無い。ネイルは降下を続けた。約束の時間まであと1分、ネイルが海面すれすれまで降りた時である。突然海面が2箇所でザーという音とともに大きく盛り上がったのである。2隻の潜水艦が浮上したのであった。それぞれアメリカとロシアの国旗が掲げられていた。それぞれの潜水艦のハッチが開き、中から出てきたのは、アメリカ大統領及びロシア大統領であった。二人の大統領には、光のように輝くマントを羽織り、神々しく空中を浮遊しているネイルが見えた。

「ゴオッド。」

思わず二人の大統領が口にした。

アメリカ潜水艦上に席が設けられ、ネイルは並んで立つ二人の大統領の前にゆるりと着地した。今は人間との混血であるが、12000年前までアトランティスでは神であった。その子孫であるネイルと、その当時の人間の子孫が始めて対面したのだった。月の住人と地球人との初めての対面でもあった。双方、しばらくお互いを眺めていたが、最初に話しかけたのはネイルであった。ネイルは横を向き海を見ながら言った。

「この場所は、懐かしい場所だ。私たちの故郷があった場所なのだ。」

アメリカ大統領とロシア大統領は思わず顔を見合わせ、そしてアメリカ大統領が言った。

「今日はこの場所にお招きいただき光栄です。あなたがネイル様ですか？」

ネイルは海から目を二人の大統領に向けて言った。

「今日はお二人ともよくおいでくださった。お礼を申し上げます。さよう、私が月からの使者ネイルです。」

その声は柔らかく澄み、慈しみさえ感じさせ、二人の大統領の緊張がほぐれていった。

ネイルが続けて言った。

「私は地球からの電波で、あなた方はよく存じております。あなた方二つの国は、私の住む月まで探査機を何度も飛ばしになられた。また人間も送り込まれた。そのようなあなた方に今日は是非聞いていただきたいことがあり、ご無礼ながらもご案内を送らせて頂きました。」

ロシア大統領が聞いた。

「失礼ながら、その、何と言うか。私も歴史が好きで、過去の歴史や諸説を、いろいろ本で読むのが趣味となっています。先ほどネイル様は、ここが故郷だったとおっしゃられた。たしか、この海域は、プラトンが言っている伝説のアトランティスがあったとされる海域ではござらぬのか？」

ネイルは大統領の目を見つめ、ウンというようにわずかに首を振った。

「アトランティスは伝説ではありません。12000年前まで、この海域に存在し栄華を誇っていたのです。」

アメリカ大統領が言った。

「アトランティスなら私も聞いたことがある。確か、火山の爆発や何かで1日で海底に没したと。」

ネイルは首を横に振り、二人の大統領を交互に見て言った。

「アトランティスは今でも月に生きている。私がお送りした品はご覧になられたでしょうか？」

二人の大統領は、ネイルを見ながらだまって首を振った。ネイルは言った。

「あの中身もさることながら、あなた方は、あれを送り届けた箱に驚かれたに違いない。だから今日おいでになったはずだ。」

二人の大統領はちらりとお互い見合ったが、沈黙するだけであった。

「あなた方が驚かれたのは無理もない。あれは私たちの故郷がこの海域にあった頃、オルハリコンと呼ばれていたものだ。もうあなた方にはわかっているはずだ、あれが何か。」

フーとため息を漏らし、アメリカ大統領が言った。

「ああ。そのとおり。箱の中身が、わが国が打ち上げたアポロの部品と解った時はビックリしたが、そう、言われるとおり、あの箱には驚かされた。」

ロシア大統領も言った。

「私も驚かされた。まだ地球の物理学では、力の大統一理論は完成されていない。なのにあの箱は、大統一理論が予言する磁気単極子すなわちモノポールでできているのだ。」

ネイルは微笑んで言った。

「さよう。その通りです。これでお解りになっていただけましたかな？」

二人の大統領は納得したように首を振りネイルを見つめた。

ネイルは静かに話を進めた。地球の二酸化炭素による温暖化が進み、最近急激に地球の総エネルギーが増加していること。それにより、月の自転の制御が限界にきていること。いつかは地球と月の交流はあるべきなのだが、そのためには地球側に他の星にも住人がいることを啓蒙しておかないと、最悪、武力の衝突もありえること。またその場合、月の持っている科学は地球の核爆弾より遥かに進んでいること。月は武力衝突は望まず、平和を希望していること。

ネイルはこれらを述べ、そのために今しばらく月の裏側を地球から見えないようにしておきたいと希望し、そのために地球の大気中の二酸化炭素除去を協力することを提案した。二酸化炭素の問題は、地球でも大きな問題であった。温暖化が進み、暑い夏を過ごすためエネルギーの多くは冷房に使われた。エネルギー効率の問題で、冷気にならなかったエネルギーは皆熱となり放出された。そのため地球の温度は加速度的に上昇するサイクルに入っていたのだ。そのため異常気象はもとより、南極や北極の氷山の溶解による海面の上昇が深刻な問題となっていたのである。

地球側はネイルの提案を受け入れることになった。

ネイルのあらかじめの要請で、アメリカとロシアは極秘の特殊部隊を編成していた。ネイルはそれら部隊に、空気中の二酸化炭素を石灰岩に変えてしまうカルシウム散布剤を供給した。地球では、まだとてもそのような技術は確立されていない。特殊部隊はそれを飛行機で地球規模の散布を行った。空気中の二酸化炭素は白い石灰岩の粒子となり、地表や海面に落ちた。大気中の二酸化炭素が減ると、その分、海に溶け込んでいた大量の二酸化炭素が徐々に大気中に移行した。総

合的には、地球の二酸化炭素は確実に減少していった。しかし海に溶け込んでいる二酸化炭素量
があまりにも多いため、大気中の二酸化炭素濃度が低くなるためには、年単位の辛抱強い作業が
必要であった。

月の自転制御の限界

やがて海水の二酸化炭素濃度が相当減ってきて、それにつれて、ようやく大気中の二酸化炭素濃度の減少が期待できそうになった時である。全くの自然現象であるそれは、突然起こった。

大西洋の一角で、大規模な海底火山爆発が起こったのだ。始めのうちは、海底の一点に穴があき、そこからマグマが吹き出していたのであるが、そこからあふれたマグマは海水で急速に冷やされ海底にあいた穴をふさいだ。その結果、地底に高圧のガス溜りができ、海底で固まった溶岩がそれを閉じ込めておける限界を超えると、更に大きな海底火山爆発へとつながっていった。結果として海底の亀裂は何十キロにも達し、盛り上がった溶岩はとうとう海上に姿を現し、島へと変っていった。火口が地上に出たことにより、より効率よく莫大な量の火山ガスが地球の大気中に放出された。火山性の雲が地球を覆う様子は月面からもはっきり観察することができた。

アメリカ、ロシアの秘密プロジェクトでせっかく二酸化炭素が減ってきたところへ、高温の莫大な量の火山ガスが追加された形となった。ガスが海水に溶けるよりも早く大気中の濃度が上がっていった。予期せぬ火山爆発により地球表面の総エネルギーは急激に増加していった。

月では自転の制御を懸命にやっていたが、もはや限界にきていた。月ではリンデが臨時の全員会議を開き、この現実を伝えた。まもなく月の自転速度が変り、やがて地球から月の裏側をさらすことになる。地球人との接触はもはや避けることができない問題となった。オリエンタル盆地の中のアトランティス遺跡は巨大なクレーター型ドームで隠されているが、やがてはそれもわかってしまうであろう。地球人との接触の第一歩をどうするのが評議された。もはや月の裏側で別世界を保つことができない以上、月はアトランティスのものであることを、最初から示すべきであるという方針が全員一致で決まった。アトランティス遺跡のドームを取り払う日が決定された。ネイルはアメリカ大統領とロシア大統領に事態を説明するメッセージを送った。月は地球へ裏面をさらす日を連絡した。地球では緊急の国連会議が招集され、無用な混乱を避けるため、各国へ事実が公開された。

的場大地も高木美奈も小学校を卒業し中学生になっていた。二人とも市内の同じ中学に通っている。ニュースでは月の自転速度が変わることが連日報道されていた。自転速度はほんの少し変わっただけなので月の裏側が見えてくるのも徐々に起っていた。少しずつ見えてくる初めての月の裏側は毎日のニュースになった。

中秋の名月の日、先生より部活は全て中止で、放課後全員が体育館に集るよう指示があった。とても大切な集会があるらしい。日本のどの学校でも、今日の放課後は教員も生徒も全員が体育館に集った。舞台には大型モニターが設置されており、中秋の名月を映すという。モニターにはテレビ局の屋上から映した徐々に登りゆく月が映っていた。テレビのアナウンサーが、月の裏側の真実をお伝えする実況中継ですと言った。みんなかたずを飲んで見守っています。やがて月は登りきり全貌が映し出された。カメラは天文台との中継に切り替わった。

大型モニターには天文台の望遠鏡を通した月の映像が映しだされた。その月はクレーターが多く普段見ている月より白っぽく見えた。望遠鏡はオリエンタル盆地と呼ばれるところが中心となるように固定された。そして徐々に倍率を切替え、オリエンタル盆地を拡大していった。

月では地球との約束の時間にオリエンタル盆地の中のアトランティス遺跡にかぶせてあった巨大なクレーター型ドームをスイッチを入れて開いた。

突然、ウワーというどよめきが走った。城の塔が見え、その両脇には、ポセイドン神殿とポセイドンの妻クレイトー神殿、更に一群の町並みが、大きくモニターに映し出されていた。

12000年前、突如姿を消したアトランティスがそこに映っていた。

続いて、内閣総理大臣による重大会見が中継された。

世界各国でも同様のことが行われ、新しい時代が幕を開けたのだった。

おわり